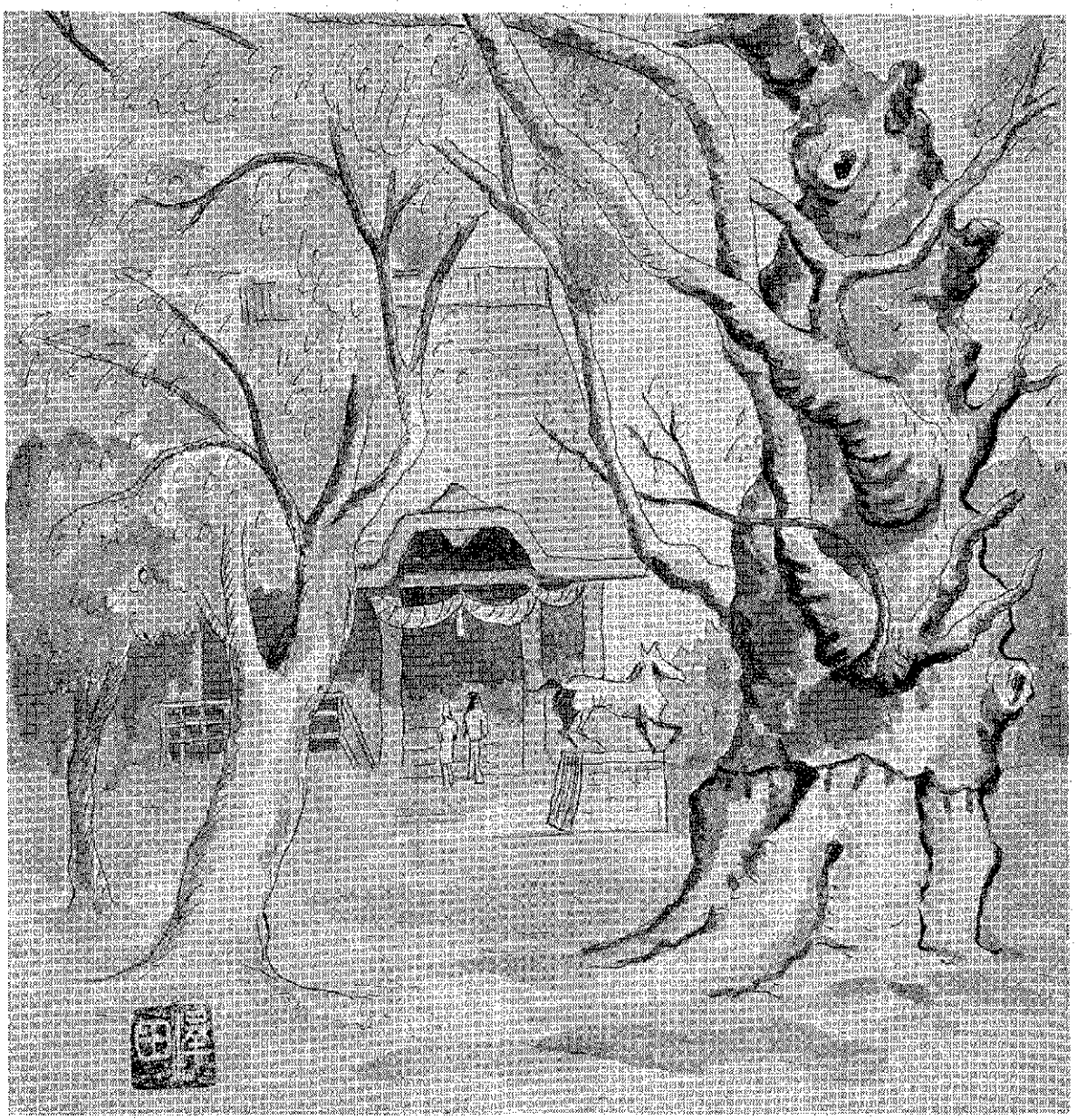
昭和33年3月15日　第三種郵便物認可　昭和60年5月15日発行（5月号）通巻第387号　毎月1回15日発行

新潟県公民館月報

昭和60年5月号

発行所　新潟県公民館連合会
【新潟市川端町2－9・県林業会館内】
【電話・新潟（0252）24－6073】【振替新潟0－4049】
発行人　会長代行　佐藤　眞武
編集人　事務局長　本田　清
【定価1部 120円 年共・年極 1,440円】



蔵王の大欅

長岡市蔵王に蔵王権現（金峰神社）があり中越地方の信仰の地となっている。

蔵王権現発祥の由来は、遠く平安末期栃尾に起り、幾多変遷の後鎌倉中期に蔵王の地に移って来た。蔵王権現は天台宗で両部神道も兼ね、加持祈禱に天下泰平、五穀豊穣、無病息災、病魔退散などを願う現世利益を主として求めるものであった。

現在は、金峰神社という立派な神社があり、その境内に大欅の御神木が聳えている。これを「蔵王の大欅」という。推定樹齢八百年、目通し周囲八・四メートルの巨木で長岡市指定文化財天然記念物となっている。

その樹下に立寄り、神社の方向を眺めた景がこの絵である。

二度の戦火を光れて現在に生き、訪ねる人々にいにしえの歴史を語りかけるようで、まことに心打たれる思いがする。

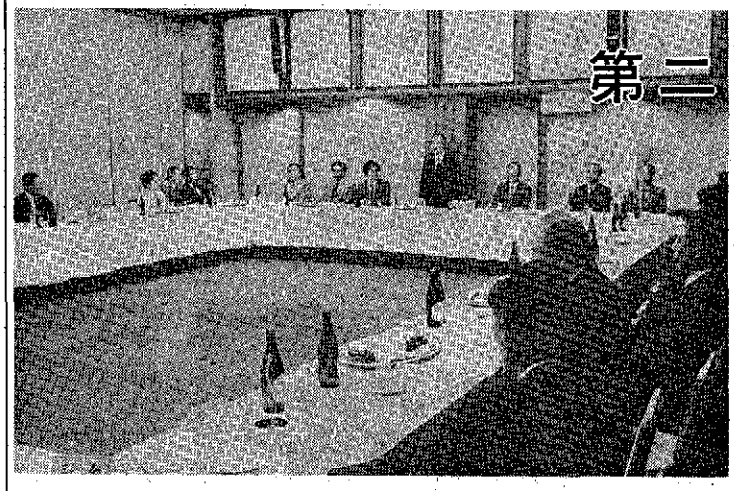
文と絵
長岡市社会教育指導員
沢田　和夫

第二回評議員会

石井会長が勇退

当面佐藤副会長が職務代行

四月二十五日、新潟市の平安閣で本年度第一回評議員会が開かれ、昭和六十年度県公連事業、予算案が審議承認されたほか、石井会長勇退にともなう善後策が審議された。種々論議のすえ、当面新会長は置かず佐藤真武副会長（新潟市中央公民館長）が会長代行として新発足することとなった。終了後、新任の月岡県社会教育課長、有坂担当社教主事、藤家下越教育事務所社教課長を交じえ懇親会を開き散会した。



（評議員会終了後懇親会を開く）

県大会基本計画・事務局庶務規定等策定

当日の出席者は三十一名、ほかに委任状提出四名。まず石井会長あいさつのあと、新任の月岡英人県社会教育課長の祝辞、有坂豊裕担当社会教育主事、藤家巌下越教育事務所社会教育課長の紹介があった。石井会長は「県における生涯教育推進の基本計画のなかでも公民館が中心的役割を果すことが確認されている。いまや箱物の時代は終り、人づくりの時代に入った。県公連も新しい体制で前進していかなければならない。」とあいさつ。また月岡社教課長は「全公連の第五次専門委員会の策定した〝生涯教育時代に即応した公民館のあり方〟に対応して、本県でも公民館を中心に新展開をはかる方向で計画が進んでいる。県公連のこれまでの努力を多とし、今後の健闘に期待します。」と激励。

議長には佐藤真武副会長を選出、議事の審議に入る。まず、一、昭和五十九年度会務報告ならびに歳入歳出決算見込みについて、二、昭和六十年度事業計画ならびに収支予算案、三、「会長の専決に関する規程」「事務局庶務規程」等の制定について、四、「公民館振興対策事業分担金内規」の改正について、五、第36回県公民館大会基本計画の策定について、六、県公民館大会における表彰について等が上程され、それぞれ原案どおり議定された。最後に「役員人事の補充について」審議。ここで、石井会長が「任期なかばだが勇退したい。県公連会長は辞めても、公民館振興市町村長連盟県支部長として、また全公連副会長として今後とも側面から力になっていきたい。」とあいさつ。これに対し出席者のなかから「なんとかして任期一つぱい留任していただけないか。」とする声が上り、副会長三名も慰留につとめた。しかし、石井会長の辞意は固く、結局のところ勇退を認めることになり、今後は佐藤真武副会長（新潟市中央公民館長）が会長職務代行として、対処していくことになった。

また、人事異動にともない欠員を生じた役員には後任者を新役員に充てることが承認された。

議事終了後、出席者の会費持ち寄りによる簡素な懇親会が開かれ午後五時終了した。

現場の実践記録募集

近く「公民館・現場からの実践記録」と題した連載特集を組むことになりました。この実践記録は、かつて、実践記録集「集い学び結ぶ」として集大成したシリーズの復活です。

字数は一、五〇〇字、活動の現場写真や資料等を添え当編集部あてお送りください。

第五次専門委員会答申 生涯教育時代に即応した公民館のあり方から

もともと社会教育は、時代の変化を予見し住民がその生活を守り、発展させるのに必要な教育課題をとらえて、適切な学習の機会と場とを提供しその成果を地域に還元することを本旨とするものであり、それは学校教育とともに生涯教育の中核をなすものである。

公民館はその実践の中枢機関としての任務を課せられている。（第一部総論による）

かつて全公連の第一次専門委員会は、公民館の目的と理念を、①公民館活動の基底は、人間尊重の精神にある、②公民館活動の核心は、国民の生涯教育態勢を確立するにある、③公民館活動の究極のねらいは住民の自治能力の向上にある、と表現した。この基本的視点は、今日もなお生きている。ただ変化してやまない現代社会においては、それらを静的に解釈するだけでは不十分であって、より動的な見方と方向づけを行う必要を生じている。（第二部、1公民館の理念による）

昭和60年度県公連役員・評議員名簿

郡市名	役職名	氏名	所属公民館名
新潟市	副会長（会長代行）	佐藤貞武	新潟市中央
新発田市		細野一二	新発田市
新津市		柴田成三	新津市中央
村上市		滝波善助	村上市中央
燕市	監事	高橋宏	燕市中央
五泉市	理事	石塚進	五泉市
両津市		遠藤威佐夫	両津市
白根市		猪股武雄	白根市
豊栄市		林俊郎	豊栄市中央
北蒲原郡	理事	山際兢	安田町中央
中蒲原郡		成田常信	小須戸町中央
西蒲原郡		小出敬三	巻町
東蒲原郡		佐藤寛治	津川町
岩船郡		飯沼好	荒川町
佐渡郡	理事	三国マリ子	相川町
長岡市	副会長	田中岬	長岡市中央
三条市		川村新治	三条市中央
柏崎市		徳間助夫	柏崎市中央
小千谷市	理事	丸山正	小千谷市
加茂市		山田欽二	加茂市
十日町市	監事	桁沢英男	十日町市
見附市		北村豊作	見附市中央
栃尾市		橋仁三郎	栃尾市
南蒲原郡		佐々木芳男	中之島村
三島・古志郡		高橋康夫	与板町
北魚沼郡		佐藤政治	湯之谷村
南魚沼郡	理事	村山新一	六日町
中魚沼郡		八重沢一	津南町
刈羽郡		藤田甲子雄	西山町
上越市	副会長	星野正夫	上越市
糸魚川市	理事	伊藤佐近	糸魚川市中央
新井市	理事	町井昭雄	新井市
中頸城郡		笹川敏夫	三和村
東頸城郡	監事	西山英一	牧村
西頸城郡		高野徹雄	能生町

灯台

「これからの公民館像」

村山新一

生涯期にわたる住民の学習機会の場、憩いの場として広く利用され発展してきた公民館も、社会経済の著しい進展、社会構造が変化するなかで公民館の運営のあり方を検討する必要にせまられてきている。

六日町では、国の「豊かな心を育てる施策モデル市町村事業」の指定を五十七、五十八年度（町単で継続中）うけ町ぐるみで取り組み公民館としてもすべての住民に豊かな文化的な教養を身につけ、心豊かな人間性をめざし連帯意識の高揚を図ることにおき、各種生涯学習の場、並びに事業を実施してきた。しかし生涯学習の必要性は認めているものの一部参加者が少なく、特定の参加者層に限られる傾向である。いかに公民館職員がすぐれた内容の事業を計画しても参加者がなければ効果がない。これからの公民館活動の中心的役割を次の二点において考えていきたい。

一、地域課題をふまえた地域の連帯感を醸成する場とする。

二、生涯教育の中心的機関として的確な情報提供の場とする。

当然のことと考えるが「心新たに」常に住民の要求を的確につかんで学級・講座の開設、事業内容の充実を図るとともに、すべての住民が気軽に、学習の意欲をもりたたせる努力をすることが最大の任務であると考える。

まもなく二十一世紀を迎えようとしている今日、科学のめざましい進歩により各家庭にコンピューターが普及する時代を考え多様化する住民要望を満足させるには、私どもは今以上に各学習、事業を、企画―実施―反省―企画のねり直し、をくり返し、その時代の要請に応える努力が必要である。

（六日町公民館長・本会理事）

資料歓迎

公民館で作成した資料や文集作品集または館報などをご恵送ください ませんか、県内の皆さんへも紹介してまいりたいと思います。

投稿歓迎

感想文でも結構、折にふれて気軽にペンを走らせてください。採用文には粗品を差し上げております。

―編集部―

公民館番頭日記 (47)

映画・コミュニティづくりのめざすもの

『コミュニティづくり、それは自分のかけがいのない人生を、もっと大切に、心も豊かに人間らしく生きようとする人びとの心のふれあいであり、その心のふれあいを土台として、自分たちの住む地域をよりよいものにしてゆこうとするところに、その目ざすものがあるのではないでしょうか。』こんな結びのナレーションで終る広報映画『コミュニティづくりのめざすもの――柏崎からのレポート』が、ようやく完成した。

○

市民のコミュニティづくりへの正しい理解と意識の高揚をねらいとしたこの映画（16ミリ、30分、カラー）は、テーマの難しさに加えて製作上の留意点として

・コミュニティづくりの主役である市民を、でき得る限り多く画面に登場させてほしい。

・市内二十二地区の活動等をでき得る限り多く画面に紹介してほしい。

という、きわめて欲張った要望等もあったため、製作を担当された㈱新潟くみあいビジネスさんのご苦労は大変なもので、撮影フィルムは実に三時間にも及んだとのことであった。

○

担当事務局であるわれわれ公民館も、具体的な表現方法やナレーションの最終原稿の取りまとめ等で随分苦労をしたが『昭和四十六年以来、現場の公民館で市民とともにコミュニティづくりの実践を積みかさねて来たのだ。』というひそかな自負が何よりもの励ましとなった。

○

先程開かれた関係者の内祝会で、映画の後全員がひとりひとり所感を発表したが、次の所感が特に印象的であった。

・生き生きとした市民がこれほど多く登場した映画は今まで見たことがない。

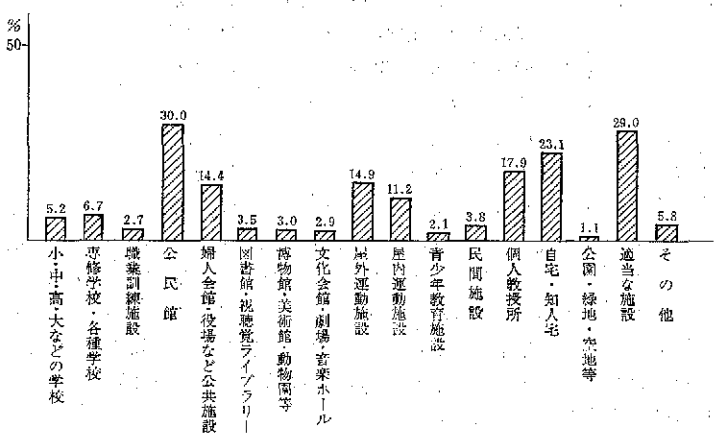
・約二十年間映画づくりをしてきたが、このたびの映画ほど難かしく、しかし充実感のあった映画はなかった。

・見る人のコミュニティづくりへの理解と意欲とともにその良さがわかってくる映画だ。

（柏崎市中央公民館 参事兼事務長 徳間助夫）

新潟大学教授
吉川　弘

第1図　利用したい学習施設



（文部省「定住圏における生涯教育システム開発に関する調査報告書」昭和55年，から）

の考え方もあろう。

民間の教育・文化事業では資金力の関係もあって（実際には受講者の負担金によるものが大きい割合を占めているのであろうが）と思うが、たくさんの講座と講師を用意することが可能である。施設・設備も整えられよう。カルチャーセンター受講者が受講理由にいうように、講師陣が魅力的、講座内容が豊富、環境や設備がよいと指摘しているのはもっともだとうなずいてしまう。だが、うなずいてしまってよいのだろうか。やはり疑問が残る。公民館はその設立の精神にあるようにすべての住民の学習要求に応えていく社会教育施設である。公民館の学級・講座にあきたらなくてカルチャーセンターに参加する人たちがあるとすれば（自治体社会教育のイメージとして「つまらない」と答えた人たちがこれに該当しよう。）公民館として考え直さなくてはならない。

親しみやすい公民館

しかし、そうはいっても公民館の学級・講座には様々な制約がともなう。なんといっても予算の範囲内で実施せねばならないという制約がある。その点でカルチャーセンターと張りあうのは困難であるとの意見があろう。その通りだと思う。従って公民館がカルチャーセンターと同じやり方で張りあうことは推奨できない。違うやり方で張りあわねばならない。違うやり方であるが、そのヒントをさきの調査に見つけることができる。それは、自治体社会教育のイメージとしてあげられた統一性、実用性、親しみやすさを強調していくことである。

講座内容が豊富であることは結構なことであるが、豊富な故にあれこれと選択し受講した結果として何が習得できたかが問題である。選択の幅はあまりないが、一つの体系をじっくり学びとることの収穫は大きいはずである。しかも実用的なことを。居間の教育・文化事業のさかんな地域（都市部に多いが）にあってはこの辺に着目して公民館事業を企画・実施していったらいかがであろうか。それに、カルチャーセンターにおける受講者間の人間関係、職員のサービスに対して満足な人の割合が他項目にくらべて低いことをみた。（絶対的に低いのではないが。）その点、公民館事業では地域における顔見知りの人が多く、公民館職員も地域と結びついた平常活動をしているので「親しみ」という利点が生まれるのである。この「親しみ」を基として集団学習を推進していくことによってカルチャーセンターでは得にくい学習効果を生み出していくことができよう。

地域の生活課題をとりあげよ

このような考え方による公民館事業は③の型への対応につながっていく。カルチャーセンターがあっても、むしろ公民館事業に積極的に参加してくる人たちへの対応である。この人達は公民館の事業内容に必要を感じて参加するわけである。この人達の感ずる学習必要は何であろうか。それは地域と結びついた生活課題の学習である。地域の生々しい生活課題は、地域に根着く公民館だからこそとりあげられるものである。講師もその地域の課題に通じていることで依頼されるのであり、そこに強味がある。この学習必要は生活課題ばかりではない。地域の歴史、自然、文化、産業などが広範囲に及ぶ課題も設定されよう。

ところで、②への対応も大切である。カルチャーセンター等が身近かに存在しない場合、学習の機会と場のほとんどは公民館事業に求められよう。このような地域にあっても住民はカルチャーセンター志向的学習要求をもっている。この要求に応えていく必要がある。さきの調査にみるようなカルチャーセンター志向的学習要求である「幅広い教養を身につけるため」、「個人としての趣味や健康のため」の学習の機会と場の提供も必要になってくるということである。

④の型もほおっておくことはできない。学級・講座等に参加しない理由を調べると、意外に、学級・講座の存在を知らないとか、参加のキッカケがつかめないとかというものが多い。これらの人たちは潜在的には学習要求を有しているのであり、公民館の働きかけいかんによって学習に参加する層ととらえてよい。

高い学級・講座への期待感

さて、これまで、公的機関の行う学級・講座等の参加者の意気ごみが弱く、カルチャーセンターなどへの参加者に意気ごみが感じられるとして、カルチャーセンター参加者の調査をもとに学級・講座の企画・実施に関する留意点を述べてきたが、公民館等公的機関の行う学級・講座参加を否定的にとらえているとしたら大きな誤解である。公的機関の行う学級・講座への参加希望は、文部省実施の「上越モデル定住圏における生涯教育に関する調査」（昭和55年）では他の学習の機会や場への希望を越えて最も多いのである。公民館関係者は、この希望を大きな拠りどころとして積極的に学級・講座等の企画・実施に当るべきである。

公民館への期待

3月28日開かれた主事連絡会議で「公民館への期待—調査資料をもととして」と題し、新大吉川教授の講義をきいた。吉川教授からその内容のあらましについて執筆していただいたので、ここに紹介する。

カルチャーセンターの台頭

社会教育の方法・形態で学級・講座・教室が重要な位置を占めていることはいまさらいうまでもなかろう。ところが、社会教育主事、公民館主事等社会教育関係者が集る研究集会で必ずだされる問題は、この学級・講座・教室への参加が退潮気味であるということである。参加者数を調べてみると、青年のための学級・講座・教室ではたしかに参加者は減少しているが、成人についてみるとむしろふえている（第1表参照）。にもかかわらず退潮気味だというのは、参加者の意気ごみが感じられないということであろうか。では、参加者の意気ごみはどんな方向に向いているのであろうか。それは民間の文化事業だといわれる。たしかに文部省調査（「民間における社会教育・文化事業の概要」）でも新聞社、放送局、デパート等が実施する学級・講座・講演会・公演・発表会は相当の数にのぼっており、その参加者数も教委・公民館主催事業参加者715万人に対し37万人である。数的には20対1ぐらいの割合であるが、その勢いは相当なものである。

第1表 学級・講座・教室参加者数

	昭和54年度	昭和57年度
少年学級・講座・教室	77,355人	54,950人
青年 〃	66,890	40,564
成人 〃	170,448	221,003
家庭教育 〃	114,775	178,840
高齢者 〃	134,203	166,140
婦人 〃	173,640	186,863

新潟県教育委員会「社会教育の現状」から

カルチャーセンターは講師で勝負

このことに注目して民間における社会教育・文化事業に関する調査を探している時大変興味深い調査研究報告に出合った。それは大阪大学人間科学部社会教育論講座の「民間教育文化事業—総合文化教室受講者に関する調査研究—（第2次報告）」（1984年）である。この調査には、新聞社のカルチャーセンターを受講した人達を対象とするものが含まれている。この人たちがカルチャーセンターを受講した理由をみると、上位3つは、

講師陣が魅力的（50.5%）
講座内容が豊富（42.2%）
環境や設備がよい（19.0%）

である。学習の目的ではつぎの2つに集約できる。

幅広い教養を身につけるため（58.1%）
個人としての趣味や健康のため（48.8%）

受講後の感想では、「よかった」とするものが94.7%である。項目ごとの満足度をみるとつぎのようになっている。

講座の内容についての満足……86.4%
講師との人間関係 〃 ……75.7%
受講者との人間関係 〃 ……62.7%
講師の教え方 〃 ……83.2%
職員のサービス 〃 ……61.7%
施設・雰囲気 〃 ……76.8%
全体として 〃 ……80.9%

全体として80.9%の者が満足しており、講座の内容、講師との人間関係、講師の教え方、施設・雰囲気については7～8割の者が満足で、カルチャーセンターは受講者に極めて好評であることがわかる。なお、受講者との人間関係、職員のサービスは、ともにほぼ60%の満足で、他の項目にくらべて低いことに注目させられる。

ついで受講者のカルチャーセンターについてのイメージであるが、

たのしい……51.3%
充実している……30.3%
金がかかる……25.2%
親しみやすい……23.6%
総合的である……22.9%

の5つが上位にあがっている。これに対し、受講者の自治体社会教育のイメージは、肯定的なものとして

統一性がある……30.1%
実用性がある……19.6%
親しみやすい……16.5%

があり、「つまらない」と答えたものが27.9%ある。「たのしい」は12.3%、「充実している」は2.8%である。この辺に意気ごみの違いがでてくるのではあるまいか。

近くにある施設が有利

ところで、カルチャーセンターの魅力であるが、最も多いのは「自宅から近い」である（男53.9%、女57.5%）。有職・無職別では、有職者に「職場から近い」が最も多く50.7%である。

これらのことから4つの図式が浮んでくる。

① 近くに他の学習の機会や場もあるが、カルチャーセンターがあればカルチャーセンターに参加する。
② カルチャーセンターが自宅なり職場の近くになく参加しようにも参加し得ず、他の学習の機会や場を利用する。
③ 近くにカルチャーセンターがあっても他の学習の機会や場に参加する。
④ いずれにも参加しない。

この4つの型に公民館がどう対応するかが問題であろう。

①と④については止むを得ないではないかとの考え方もあろう。他に学習の機会や場があってもカルチャーセンターがあればカルチャーセンターに行くというのだから、それは受講者の自由で、それをさしとめたり、強引に公民館の学級・講座にひきこむことはないということである。また、公民館の学級・講座はカルチャーセンターと張りあう必要はないと

新生公民館繁盛記 (47)

公民館は花ざかり、これまでにすでに五十二館の公民館が登場。好評をいただいています。これからもどしどしご紹介します。

旧小学校跡地を転用

うれしい地域文化のお城

柏崎市上条公民館

（柏崎市上条公民館前景）

十二畳と六畳の二部屋しかない旧上条村当時の農屋を転用したものが上条公民館であった。窮屈で不便な中にも、関係者一同が懸命の努力を重ね、長い間楽しくやってきた。他の先進地域の新しい立派な公民館を視察する度に羨しく思った。

時代の流れで、当上条小学校も統合問題が生まれ、上条小学校は隣村と統合し新地へ、建設の運びとなり、旧小学校の跡地に公民館の敷地を確保することができた。

当地は柏崎駅より南に約八キロメートルの国道三五三号線沿いから少し西寄りに入った所に位置し、四方に紅葉なった刈羽三山を眺め、季節折々には虫の音も聞こえる静かな農村地域である。

昭和五十八年六月いよいよ待望の公民館建設の順番が廻ってきた。講堂は小学校の体育館として最近造られたので、そのまま残され内装工事し公民館と接続することになった。又グランドも小さいながら使用可能となったが既設体育館のどこに接続するのか、その建設位置に関し、各層から選出された委員により一冬中がかりの真重討議がなされ、地区内がそのことにのみ熱中し良しからぬ状態となったこともあった。

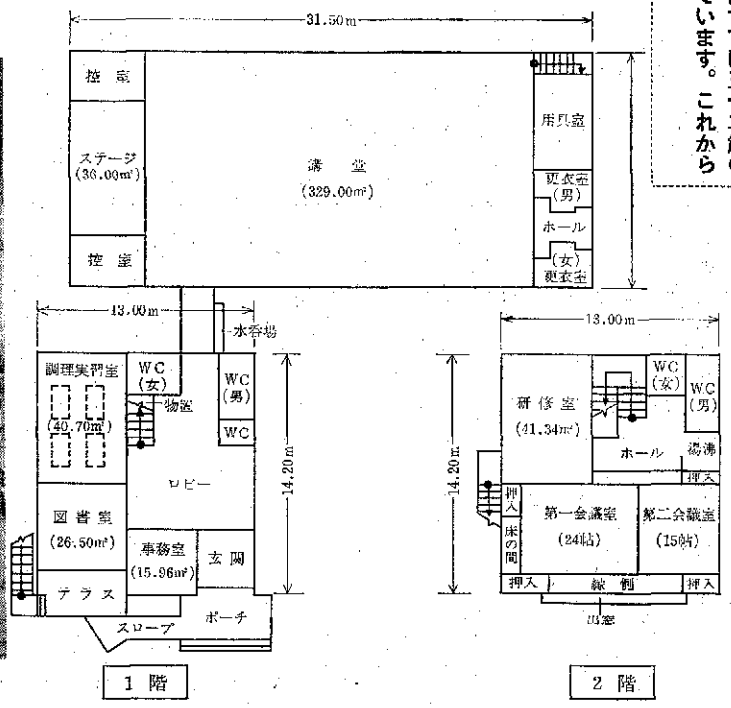
幸い市側当局の適切な指導を得、昭和五十九年三月末日目出度く上条公民館の竣工を見ることができた。村民一同慶びに溢れ四月八日地域あげての開館式が華々しく挙行された。グランドもその後大量の土砂搬入により立派に整備完了し　新生公民館のお祝い事業として地域内部落対抗の大運動会を開催し応援合戦等アイデアを生かしたいろいろな行事があり、わが地域最高のコミュニケーションの場となった。

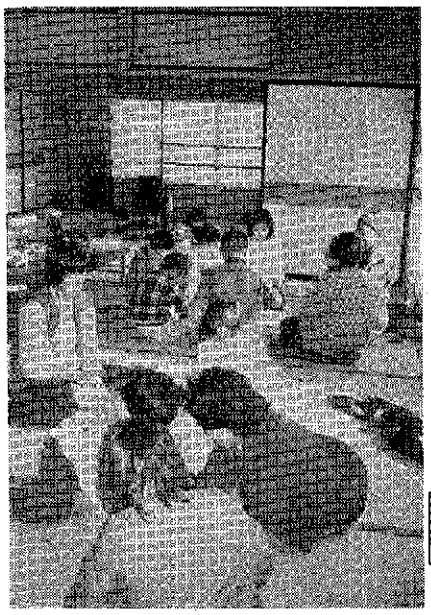
木の香漂う近代的館において教養的講座を始め、娯楽、スポーツ、趣味等、毎日のように楽しく明かるい話し声がする。折角できたこんなすばらしい公民館。老いも若きも皆んな、何時でも気軽に活用していただき、地域文化のお城にしていきたい。

心と心のふれあいをいつまでも大切にし今後は、お互いに責任ある努力が必要と痛感している。

（上条公民館長　会田文吉）

上条公民館平面図





チビッコ公民館
伝承ゲームを習っているところ

手記　長岡市中央公民館での「はたちのつどい」

長岡市中央公民館で実施している「はたちのつどい」。定例会には大勢の若物が集い、班を編成して活発な活動を続けている。このたび手造りの「文集」を発行。交歓の場を一層ひろげた。その中で4班の実行委員をしている中川宏美さんの一編を紹介する。

My message　～一期一会～

小川宏美

はたちの皆さん！

「'85つどい」はいかがでしたか？

ある時はヒョウキン娘、ある時は班の時間が始まる頃にコッソリ（？）飛び込んで来た（誰だ！シュークリームのにおいをかぎつけてきたんだろうと言ったのは!!）パティさんです。

ここに集まった人々が、どんなに小さくてもいいから輝くダイヤモンドを見い出して、明日からの生活に歩み出してもらえれば――などと思っているんです。

☆　☆　☆　☆　☆

私は人が好き。この小さな国日本の中にも一億以上の人々が、笑ったり泣いたり怒ったり――

いろんな人間が生きている。

そんな人たちと一人でも多く知り会えたら、友達になれたら――いいなと思う。

1人の人でもいろんな顔を持っているもの、長所も短所もいっぱいね。そんなもの全部まとめて人が好き。

誰でも一人きりじゃ生きていけないから、「人」という字支え会っているという意味なんだって。

出会いがあって、恋したり、失恋したり、裏切られたり、裏切ったり、ケンカしたり

長い人生いろいろあってあたり前。

だけど　20才の友達へ!!

人は未知の惑星。
裏切られてもいいじゃない。
傷つけられてもいいじゃない。
そんなちっぽけな事恐れないで　心と体で
ポンとぶつかって行こうよ。

この“はたちのつどい”をきっかけにして、友達の輪＆和を広げてほしいなと思います。

私の21年の人生の中でいろいろな人と出逢い、たくさんの友達も出来ました。

幼なじみのK君……よく木登りしたり、野球やったりしたネ。

中学の時からの悪友Yさん……何ともう1才の男児を持つおーい母親

高校3年間共全く同じクラスだったというメズラシイ6人組

Nさん……私の性格よーくわかってたよれる人。

Y子さん……いつでも明るく元気な子

Rさん……“6人組”の中では私と最も古い中学からの友

Aさん……外面オットリ内面シッカリさん

Sさん……元気少女、この一言につきます。いい看護婦さんになってね。

長速会（高校のクラブOGOB会）の諸氏

県大会、全国大会、合宿etc.クラブで何かあるというとパッと集まる！県内外を問わず集まってしまう同輩、後輩達、私の元気fulの源です。

加茂出身自称ヘソ曲がり人間S先生

私をはじめ6人組の良きアドバイザー

さすが年の功!!

サークルくれよんのみんな……今年もドジなパティさんをよろしく！

はたちのつどい、くれよんの活動を通して知り合ったみんなまだまだ沢山いるけどとても書き切れません。

これからもずっと、たとえ細い細い糸であっても強く丈夫な糸である様につないでいきたいと思います。

時々こう思うんです。本当はとても淋しがりで、泣き虫で弱い人間だと。だから、そういう面を見たくなくて、見られたくなくて、家の中でさえも、悩みなんてないように泣き顔になりたいのに元気fulの笑顔の姉貴を演じてる。

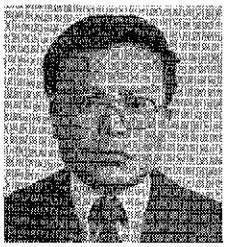
変に強がりで、気が強そうに見えている時の方が多いんじゃないかな。

小さな子供の瞳はきらきらしていて澄んでいてとてもきれいです。瞳は心の窓、なんて聞いた事あるけど本当だなと思います。いつまでもその瞳を持ち続けてほしいと思うけど……。いつかだんだんその光を失っていくんですよね、人間は。

でもそれを忘れない様にしたいと私は思います。

表題にもしましたけど『一期一会』私の好きな言葉の一つです。もとの由来はお茶―茶道―から来た言葉だそうです。そして自ら働きかけなければ決して相手からは何も返っては来ないのです。何かを相手に期待してやるのではなくて自分の成長に期待して、チャレンジしてほしいと思います。

プロフィール



両津市社会教育係長（公民館担当）　伊藤雅治氏（44）

伊藤雅治四十四才、昭和十五年生れである。両津市社会教育係長（公民館担当）伊藤雅治氏（44）

伊藤君は戦中派―今、公民館のチーフアレクターの仕事をしている。何よりも意欲的のことが高く評価されるところであろう。両津公民館に重要な行事が二つある。行事というよりも活動というべきものであるが一一つは分館役員研修会で、もう一つは地域開発講座である。

全長八十四粁に及ぶ海岸線に列村形式に立並ぶ村々、五十一の分館から成立っている両津市において、本館と分館を結ぶ大きなきづなで、しかも分館に活力を与えるものでなくてはならないのである。

分館役員研修会といっても、年間四回もやるのであるから、余程の企画力がないと清新な活動にならない。又地域開発講座にしても六地区で行なうのであるが、地域のニーズに会わせた内容と盛上りへの演出が必要なのである。

伊藤君はこの企画と演出を見事にやってのけた。

この企画と演出への熱意は戦中派と係わりがあるのであろうか。彼は、このように言う。

『百姓をしている家を継がなければならないので　農業の指導者と目指して農業高校へ入った』その後県立農業講習所で二年研修に励み、小千谷農協に就職、二年後家庭の事情で故郷に帰り市役所職員の選考試験に応募、合格―昭和三十八年四月のことである。

相撲、花の三八組が生まれた年、彼は職場に誕生した。花の三八組にあやかってか同期はなかなか優秀な人揃いである。

彼は現在一町歩近い田も耕作しているそうであるが、若干の道草―土に生きる心とそ企画、演出そしてその熱意をつくったものでなかろうか。

書もかけば絵画にも関心が深い、なかなか多趣味である。好漢自重、自愛飛躍を期待する。

（両津市公民館長　高橋　啓作）

あの頃のこと

占領下の公民館 (1)

飛田一郎

私が公民館に勤めることになったのは、昭和二十三年五月のことであった。当時、市の厚生課に（課長の次の職にあった）いるときのことで、戦後まだ住民の生活が安定しておらず、働らくに職がなく、住むに家なく、食糧不足という時代であった。

加えて、海外からの引揚者、空襲を受けた戦災者、疎開者等、住宅困窮者があふれていた。その対策として市では、旧歩兵連隊跡の兵舎を住宅に転用するため、間仕切り工事を実施し、これらの関係者四百五十世帯の入居を進めていたときのことであった。私はようやくこの仕事を完了し、市役所にもどったときのことであった。市長に呼ばれたので行ってみると、突然「君は明日から公民館勤務だ。」といわれ驚くとともに、なにがなんだかわからぬままに辞令をいただいた。これが私と公民館との出合いである。

当時はまだ占領下であり、NHKにはJHQが置かれ、全国の都道府県庁所在地には軍政部が置かれていた。JHQからは各府県に対して緊急に公民館設置とナトコ映写機の受入れ体制づくりの指示があったが、本県では、その対策についてJHQの指示どおりのことをしなかったため、当時の課長と補佐の両名が現職にいることができずにその職を去るという一幕もあった。

県はこれに対し、緊急対策を講じ、新しい社会教育課長に吉川浩次氏、公民館係長には境井弟三郎氏、視聴覚係長には佐藤嘉一氏、少年係長には伊藤新作氏、婦人教育には女史、成沢女史を配した。

本県軍政部は新潟市の公会堂に置かれ、軍政部長にはコックス氏、公民館担当にはダイ少佐、青少年担当にはライト中尉、婦人教育にはメヤー女史が配置された。

公民館の設置目的は、戦後日本の民主化であり、住民の生活と行政のなかでどんな問題があるかを発見し、それを対決させ解決していくのが公民館の仕事であった。またそのためのCIEによる文化普及の手段のひとつとしてナトコ映写機による視聴覚教育が普及された。

ナトコ映写機は、戦争中アメリカ兵を教育するために用いられていたもので、公民館では十五回以上上映したら、その結果を話し合って、速達で軍政部へ報告することが義務づけられていた。この映写機の操作も、三日間講習を受け試験に合格した者だけが許可された時代であった。私たちは月一回新潟の軍政部へ出向いて、公民館活動とナトコ映写機の運営状況を報告し、かつ指導を受けたものである。

占領時代、新潟軍政部のコックス氏は、当高田市へ五、六回来られた。新潟から快速艇で直江津に上陸、ジープでやってきた。公民館へは二回、税務所へは二回、高士のブドウ園へ一回、有沢製作所へ一回であった。その他密造酒と隠匿物資の摘発にも来高、なかなかスピーディで能率的な行動であった。

当高田市は、追放団体の偕行社（将校クラブ）を公民館として使用することで許可を受け発足した。この施設は大小十五余りの部屋があり、環境のよい場所であった。その施設の中には今上陛下が摂政宮当時（大正十三年秋）陸軍大演習が金沢で行なわれた帰路、この施設の二階の部屋に一泊されたという由緒ある部屋もあり、天皇の間として保存されていた。

何分、市自体が公民館に対する知識もなく（これは全国的にも同じこと）公民館の私どもも同じということで、私ともう一人の若い職員がいたが、この職員は間もなく退職して代りに太田重治君が入ってきた。太田君は映写機操作は名人であり、ポスター、謄写板も勝れており公民館にはうってつけの職員であった。

公民館活動として、まず始めたのは、戦時中消えてしまっていた各種文化団体や体育団体の再建を図り、それらの団体との共催事業であった。また当市は、日本スキー発祥の地であり、発祥以来のスキーの資料の収集に務め、館内に日本スキー博物館の一室を設けた。これが現在の上越市の総合博物館誕生の因となっている。

公民館活動を住民に理解されるようになったのは、昭和二十七年ころのことである。この年、公民館で公営結婚の実施に踏みきった。新しい憲法と民法によって、人権尊重を柱とする人と人との結婚式。最初は、以前の風習も残っていたが、次第に公営結婚式の時代となり、近隣の郡市へも普及していった。

（元高田市中央公民館長・元県公連会長・上越市在住）

筆者紹介

草創期の公民館を語れる人は少なくなった。草創期の公民館活動は建物もなく、予算も少なく、職員もまた少数精鋭主義で、ただ情熱と使命感のみがさきがけとなっていた、飛田さんは、その頃のことを語れる貴重なお一人。

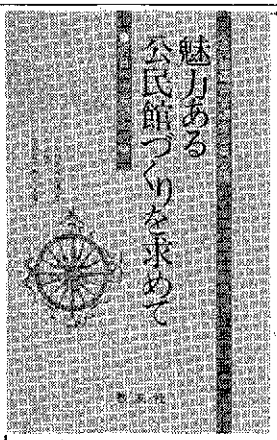
筆者の飛田一郎氏は、戦後間もない二十三年、高田市公民館に配属されて以来、一貫して公民館活動に従事、その間、県公連主事幹事会、理事、会長の要職を歴任し、昭和四十年四月県公連会長退職後も高田市公民館長兼社会教育課長を務め上げ四十五年退職。その後も市連合会の要職につかれるなど活躍された。

（編集子）

公民館運営審議会委員必携

魅力ある公民館づくりを求めて

☆明日への展望と方策☆



朝日奈　博・著

新書判　一六〇頁　定価　六〇〇円（〒実費）

本格的な生涯学習時代を迎え、市民の学習ニーズにどう応えるかが、これからの公民館の課題であろう。教育産業が花ざかりの中で、公民館のイメージをどう新鮮なものにするかが決め手と思う。だからこそ「公運審」の力がいまこそ必要になる。しかも、住民・団体の利益代表としてだけでなく、真に公民館の「立場」を尊重した発言と行動が求められる。

お申し込みは県公連事務局へ

あとがき

五期十一年間にわたり、県公連の名会長として、活躍された石井会長が、勇退されました。

長い間ほんとうにありがとうございました。石井会長は今後公民館振興市町村長連盟県支部長として、また全公連副会長として、これまで以上に努力してくださることを約束されています。草創期以来の公民館を知る数少ない市長とし、今後ともいっそうのご指導とお力添えをたまわりたいものと存じております。

（本）